

こどもの物化としての「虐待」

土屋 明美

〈熱いメッセージ〉

息をはずませながら飛びこんできた九歳の女の子、「私ね夜もちゃんと寝て、ご飯も食べて、いい子にして、今日がくるのをずっと待っていたの」と。

なんと、熱く、濃厚なメッセージなのでしょう。まるで愛の告白のように。いままで秘密にしておいた空気のベールを、一言一言にかぶせながら、玉手箱をそっと開くかのように話しかけてきます。一瞬、私は吞み込まれそうな気分になり、心で何かが点滅するものを感じました。

そこで、とっさに出てきたのは「私もあなたを待っていたのよ」という、なんとうすっぺらなきまり文句だったでしょう。申し訳なく思われ、私の心の光は弱くなっていききました。

人間の心のゆれが行動として、他者に見られ、社会から問題視され、その行動の原因や意味が解説され、対応策が練られ、その行動がまとまりをもつ概念として括弧でくくられる。「家庭内暴力」も「登校(園)拒否」も。そして、いま、「学習障害」が、この「児童虐待」が生まれようとしている……。これらのことについて

日々の教育臨床事例から学んだことを中心に、考えてみようと思います。

*

この女の子の担当になった時、母親担当者から知らされたことは、母親の不規則な生活から、この子は夜安らかに寝ること、ご飯を食べることが、毎日十分にはできていないということでした。この子にとっては、夜ねること、ご飯を食べること、いい子にしているという普通の生活ではあたりまえのことが、特別に大切なこととされており、それがセラピストにささやかれ、訴えられたのです。

母親からは強い心理的拒否を受け、生活面でも十分に保護されていない状態のなかで、この子は夜尿、不登校など行動で懸命に「何か」を母親に訴えようとしています。しかし、その行動も、結果としては母親の子どもを嫌いに思う気持ちを、強める方向に作用してしまいません。母親が子どもの存在を拒否すればするほど、子どもは母への「愛」を告白しようとします。そして、この子

どもにおいては、過激なほどの依存性・自己顕示・攻撃性が、身につけてしまったようです。子どもから母親へのすがりつくような気持ちが枯渇していく時、この女の子は母に何を向けるようになるのでしょうか……。

親による保護の怠慢を責めても、問題の解決にはならず、家族を社会的においつめることにもつながりません。事実、この親は相談機関へ行くと自分のしている生活を否定され、だめになると思いこみ、おそるおそる入室していました。それが、数回目「子どもが楽しみにしているからこれからは来ます」と、言うのを聞いて、子ども担当者として救われる思いを抱きました。

母親カウンセリングと並行して、この子と出会って、できることは、「心の安らぎを共にする」ことであり、不登校の状態に直接にかかわることはありません。

現在の生活状況において、子どもが何を要求しているのかを正確に見極めながら、子どもの代弁者として、子どもの叫びを親や学校の先生に拡声しながらかわり続けることで、家族や子どもを保護する力を育て、感情の

世代間伝達を上手に機能させる一助になるのではないかと
思います。

△感じること・行為すること▽

「この子とはどうも気があわないんです、妹はいいんですけれど」「この子にはつい遠慮をしてしまいます」など。このように訴える親は珍しくありません。これを捉えて、「最近、子どもを受け入れることのできない、親になれない親がふえている」という人もいます。そうでしょうか。

めまぐるしく、人や情報が行き交っている現在、親たちの子どもに思いをはせる気持ちのありようは、揺れに揺られています。揺れを増幅させるものは、様々な育児情報であり、子どもを比較する目であり、母性・父性神話です。社会で問題になっている事柄が、知らぬまに家族の壁を乗り越えて、子育て真っ最中の親に迫ってきます。

子どもと一緒にいて、時にはイライラするのは当たり前

前であるのに、いけないことであるかのように思い込む風潮もつくられているようです。「虐待」という言葉の過った使用もこの傾向を増長させる危険性を含んでいます。

感じることと行為することの間には、隙間がありますし、感じたことをすべて行為に表すわけでもありません。時には否定的に感じることもがあってもいいわけです。否定的に感じることは、その子どもへの直接的な思いや、自分の内なる子ども・親・兄弟へのファンタジーが混在しています。

否定的な感情を、追い払おうとすればするほど、それは、心にくいこんできて、より強い他者否定感、ひいては、自己否定感を育てることもつながります。

いろいろな感じることは、感じたままにして、子どもとは現実的対応を続け、子どもの一瞬の輝きをしっかりと捉えることが必要なのではないでしょうか。同時に、親が自分自身をまるごと受け入れていることが大切だと思います。

△「共に」の感じを育てる▽

「Aちゃんは、幼稚園にいくのをいやがり、お母さんと離れる時に泣いていることもしばしばでした。」

『幼稚園は行くもの』と、お母さんは思っていて、強引に登園させていました。幼稚園では友達と遊ぶことが少なく、すみっこで泣いていたということです。また、Aちゃんは、先天的な病気のため、手足の動きがゆっくりで、衣服のぬぎきにも時間が必要で、かんしゃくを起こして泣いてしまうこともあります。お母さんは、泣き声をきくとイライラして、強く叱ってしまいます。時間をかけたり、少し手伝えれば、子どもが一人で出来ることもすぐに手伝ってしまいます。」

「小学校一年生のBちゃんが風呂敷をマントにして、一人で遊んでいます。それをみたお母さんは、なんてつまらないことをしているのだろうと、Bちゃんが泣くのもかまわずに、風呂敷をとりあげて『お勉強しなさい』と、机にむかわせてしまいます。」

この二つの例は、程度の差はあるとしても、よくみうけられる光景なのではないでしょうか。「親の感情中心の子育て」「子どもの発達への理解不足」「学習中心の生活構造」などの言葉でくくられましょうか。この場合に配慮する、重要なことは、親子が、びったりと出会えるように援助することではないでしょうか。特に重要なのは、親が子どもの行為の意味を捉え、「共に」の、感じを育てることです。

子育てに関する情報に真面目に付き合うお母さんであればあるほど、子どもを見る目にフィルターの掛けられるおそれがあります。乳児期の育児中心の育児書を読むのと同じような構えで、心の発達の著しい幼児期についての育児書を読んでも子どもの真の姿は見えてきません。子どもの心の発達は、それを暖かく待ち望む環境で育ちます。

親から子への一方的なはたらきかけは、子どもを窒息させてしまいます。子どもも喜ぶからと、親が正当化して、幼いときから人工的な空間（塾や過度の稽古事）に

子どもを追いやっている状態はさげなければなりません。

親が自分の心の揺れに揺られて困惑するだけでは、親の心は子どもに届きません。子どもの心と一緒に揺れてみたら、何かが見えてくるかもしれません。「私がしっかりしていなかったら子どもの教育はできません」と、毅然とした態度で反論されることもあります。

親子関係についての心理教育的治療あるいは母親カウンセリングが必要と判断される場合もありますが、多くの場合、親が親として構えをやわらかくし、子どもが変化し、成長する歩みを自分たちも「共に歩む」と、自然に問題は消滅していきます。そこに親としての成長も認められます。

Aちゃんのお母さんとは、「泣き声は嫌い」ということについての面接を継続しながらロールプレイを通して、子どもへの補助自我的かわりかた（「共に」の姿勢）について、体験を重ねていきました。「子どもの要求にこたえるって心地よいことですね。いつもと少し違

うようにかかわってみたら子どももいつもとは違うように応えてくれました」など、ささやかな、かつ大切な実感が聞かれるようになりました。心理教育的な面接と並行して子どもと「遊ぶ」ことでBちゃんのお母さんは、子どもと心を拓いていられるようになりました。

△子どもを物化すること▽

かわり方の科学からは、人と人との関係は、次の三つのかかわり方が現実的に機能している状態、と定義されています。つまり、①自分や人や物が、たがいに寄りそって助け合いながら育つ関係、愛を育てる関係（内接的）②自分も人も物も、それぞれが交わって新しい動きをつくりだす関係、愛し合う関係（接在的）③自分や人や物が、触れあってそれぞれが育っている関係、寄り添う愛の関係（外接的）。

そして、さらに、私とあなたの関係は、ある一瞬は、心理的世界では一心同体と感じられても、現実的な世界では身も心もすべて重ね合わせることはできませんし

(内在的かかわりは成立しない)、私とあなたがまったく関係なくなるということもありえません(外在的かかわりは成立しない)。

ともすると、治療者や親・教師は、内在的かかわりを、お互いに行っているような錯覚に陥ることがあります。「相手のことはすべてわかってる」「自分の子どもなのだから何を考えているかはすぐにわかる」「自分の子だから私の思い通りに育てる」に近い意味の言葉を口にすることがあるのではないのでしょうか。

子どもが自分の思いどおりにならない時、突如として親は子どもを外在化させます。「おかあさんの言うことをきかない子なんて置いていきますよ」などという親からの子どもへの脅し文句はまだみられます。「お母さんのいうことをきかない」とは、つまり、親の思い通りにしようとして(内在化させようとして)言うことを聞かない子どもは、一瞬のうちにあちらがわの世界に置き去りに(外在化されて)しまうわけです。子どもが必死になって涙で「ごめんさい」と、お母さんに訴えて

も、その気持ちを十分に説明する言葉は未熟で、正確には伝わらず、お母さんは「聞き分けのいい子だ」などと、親の判断で勝手に決着をつけたりします。

このようなことから考えると、外在的かかわりは、内在的かかわりとは異極にあつてつながらるかかわり方、といえます。

親が、子どもを内在化・外在化させる時、両者の状態の間を行き来する時、そこに問題状況が成立していません。その極端な例が「虐待」といわれる現象なのではないのでしょうか。内在化できるはずのない子どもを物のようにならざるに内在化しようとしてはたせず、突如として物のようにならざるに外在化させる状態、親から子へのカタストロフィー的な反逆、とでもいえましょう。

内在化した状態のまま子どもとかかわり続けたり、(たとえば、親が子を一方的に愛し、子どもの世界を取り込みつづける)、また、外在化させ続けたりする状態(たとえば、子どもへの、子どもからの愛を無視する)は、どのような意味をもっているのでしょうか。

子どもにとっては、どちらも心地よいとはいえませんが。愛されかたが問題なんだよ、とささやく声が聞こえてきはしないでしょうか。「虐待」概念を、あまりに広げて捉えることには、先にも述べましたように、親の子育てへの不安感を増長させることになりかねません。しかし、「親の愛、教師の愛、教育愛など」という美名のもとで、何がなされてきているかを振り返ることは、子どもが子どもらしく人生のある時期を安心して過ごせるような人的・物的環境を創るうえで、大切なことであると思います。

△未知の親子感覚の発見へ▽

「子どもの物化としての虐待」という表題で、「親子関係」への思い込みが強いあまりに、子育てを誰でもが成功させねばならないと、性急になりすぎてはいないだろうか、「子どもの話を聞いてあげなければならぬ」とか「子どもの言動に常に注目していなければならぬ」といいうことに、親が暗黙のうちにしばられてしま

い、子育てにまつわる煩わしき、イライラした感情を、自分のものとして認めることができず、その結果「わたしは、この子を愛していません」と、言わせてしまい、思い込ませてしまうことがあります。いだろうか、などについて述べてきました。

かけがえのない一人一人が、関係しあっている現実を「共に」支えあいながら、それぞれにとっての、未知の親子感覚を、自己において、家庭において、職場において、社会において、育てることが期待されます。

参考文献

- (1) 松村康平監修 『こころの育児学』 講談社 一九八三年
- (2) アリス・ミラー 『魂の殺人』 新曜社 一九八三年
- (3) パトリシア・キーホー 『ライオンさんにはなそう』 ビデオ・ドック 一九九一年

厚木市青少年教育相談センター
日本心理劇協会・関係学研究所